

創設者 美馬 昇 先生の願い

[昭和 60 年 学園パンフレットより]



学園長 美馬 昇

いま最も必要とされているのは、知・徳・体のバランスのとれた人間教育であり、子供たちひとりひとりの個性を生かし、豊かな心を磨くための教育です。

学園長である私は、かつて戦争のために両眼失明の状態に立ちいたったことがあります。そのとき漢口の野戦病院で、幼少のころ眼病に罹ったことを話したために、戦傷者でありながら戦傷者扱いにされず、もちろん国家補償など得られるはずもなく、廃人同様の身で社会に投げ出され、当時の周囲の人々に愚かな正直者と笑われました。

しかし、馬鹿正直なるが故に自己の運命を受け入れ、世をうらまず、他人の力に頼らず、自らを信じました。戦死した多くの戦友を思い、廃人同様の身ながら生かされている大自然の心を思いました。何かをなさねばならぬ、残された生命を社会のために役立てたいと決心いたしました。いうまでもなく、その途上における苦難は筆舌に尽くしがたいものがありました。私は、自己に関する一切を捨てました。

少しずつ私の眼に奇蹟が起こりはじめたのは、自分が生きることの究極を他を生かすことに見出した時からでした。治療も受けないのに、多くの眼科医から見放された私の眼に視力が戻り始めたのです。現在仕事に差支えない程度の視力が与えられております。私は以下のようなことをその道程で得ることができたと確信しております。

“己を滅して他に生きる、他が生かされる道は、私の生きる道なり”

これは決して、自己犠牲というのではなく、他を大切に思う心が自己を拡大発展させる、自己の人格の向上につながるという、実践の精神であります。人は、決して自分ひとりで生きられるものではない。生徒諸君において言えば、よき御両親、よき師、よき友に恵まれた環境の中で、ああ、ありがたいなあと感謝しながら生きることによって初めて、ひとりの人間として成長できるのだということなのです。自己に執着する心は貧しいですが、他人を押し頂くところには、無限の力が生まれてまいります。自分が生きているのは他人のおかげ、ひいては天地自然大宇宙、はかり知れぬ巨大な力と無縁ではないような気がするのです。確かに、人は、自らが生きると同時に生かされているのです。無限の生を重ね、無限の死を重ね、全てが波のようにただよっていくこの世界で、人は自分の生を限りなく愛おしみ、力いっぱい生きねばなりません。私は自分の眼に視力が戻ったとき、更には、光は外に求めるものではなく自己の中にあり、と確信いたしました。自らの心の中に光を見出したとき、外から光が与えられる——建学の精神はかく生まれ、“生光”の命名はかくなされました。

今こそ、“心”を大切にしなければならぬ時です。単なる机上の学問では、間に合わない時代がもう来ているのです。自分の心の乱れには、案外気がつかない、安きにつく本性を持った人間には、環境こそが大事です。

人と人との心のつながりを通じて豊かな体験を積み重ね、その中から自己を見つめ直し、行動できる人間に成長してほしい。

本学園では、幼・小・中・高の一貫教育が確立しています。同学年の横のつながりだけでなく3歳から18歳までの縦のつながりは、やさしさや人を思いやる心を育み、人間的成長へと導いてくれるものと信じています。恵まれた集団生活の中で心を磨き、頭脳・身体を練り、バランスのとれた学力・技能・実力を身につけることが、真の人間教育であり、本学園教育の進むべき道と考えております。